

展 望

人文学のための古代 DNA セミナー

趣 旨 説 明

宮崎 千穂

ご紹介にあずかりました、北海道大学の宮崎と申します。どうぞ、よろしくお願いいたします。それでは、趣旨説明をさせていただきたいと思いますので、画面を共有させていただきたいと思います。

では、趣旨説明をいたします。近年、自然人類学や古病理学の分野では、古代の生物標本から抽出された DNA の解析という手法により、ヒトの遺伝的関係、それから感染症の起源や伝播などについての研究がめざましい発展を遂げております。そして、そうした研究に基づきまして、新たな人類史像が提示されております。例えば、黒死病と言われましたペストや梅毒など、病気の起源や伝播ルート、またその年代などについても、従来の文献史学が明らかにし得なかったことが、次々と明らかにされております。

しかしながら、歴史学や考古学などの人文学分野の研究者の多くは、こうした古代 DNA 解析に基づく研究成果を受け止めることに慣れておりません。そうした研究成果を、いかに理解すればよいのか悩むこともあるかもしれません。

自然人類学と人文学とでは、それぞれの研究手法や、明らかにできること、特性が異なります。そうしたことを踏まえまして、文理の融合や協働を進めていくにはどうしたらよいのかというようなことが課題となります。こうした人文学の研究者たちの声を背景といたしまして、本セミナーでは古代 DNA・古代の病原体 DNA 研究の、まさに最先端におられるお二人の研究者、水野文月先生と、澤藤りかい先生に人文学の研究者が知っておくべき基礎的知識から、研究手法、論文読解のポイントなどについてご講演いただくことにいたしました。

ここで、本セミナーの企画運営の担い手をご紹介いたしまして、企画意図につき補足したいと思います。本セミナーは、主催、共催をいたします三つの科学研究費によるプロジェクト、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、岡山大学文明動態学研究所にお支えいただきながら、ユー

ラシアという広域を舞台として、またさらにはユーラシアから地球全体を視野に入れて、人類の新しい歴史像を描くことに挑戦をしています。

まず、私が代表を務めており、本日の司会をされている廣川和花先生、諫早庸一先生にもご参加いただいているプロジェクト「近代ユーラシア高緯度帯の風土病とそのパンデミック化：帝国医療研究の拡張を目指して」（科学研究費補助金基盤研究 B、宮崎千穂：21H00500）は近代のユーラシアを舞台とした病、特に風土病、流行病のありようと、それに対する人間社会の対応について、主に文献史学の立場から解明することを目指しています。松本直子先生、瀬口典子先生のプロジェクト「出ユーラシアの統合的人類史学：文明創出メカニズムの解明」（科学研究費新学術領域研究（研究領域提案型）、松本直子：JP19H05731）では、人類の文明形成のプロセスがユーラシアから世界へと拡散したヒトの生態的地位の構築という視点から学際的に解き明かされようとしています。さらに、諫早庸一先生のプロジェクト「『14 世紀の危機』についての文理協働研究」（科学研究費補助金基盤研究 B、諫早庸一：21H00555）では、「14 世紀の危機」といわれる現象が、主にユーラシアを舞台として、古気候学、文献史学等の手法により検討されています。いずれも、文献史学、考古学、人類学、医学、環境学など異分野の研究成果を参照し合うことが自らの研究に実りをもたらす研究課題です。

最後のスライドになりますが、セミナー参加者の学びの一例といたしまして、私個人の研究の関心から、本セミナーで勉強させていただきたいことをお話したいと思います。私は、梅毒という性感染症をめぐる歴史の研究をいたしておりますが、梅毒の起源や伝播ルートについては、従来、諸説が語られてまいりました。多くの方が耳にしたことがあるのは、おそらく、コロンブスがアメリカ大陸からヨーロッパへと持ち帰ったという主張かと思います。しかしながら、それに対してヨーロッパなどの「旧大陸」を、梅毒の起源地だとする説もあります。スライドに掲げました地図（表 1）は、明治・大正期に東京帝国大学で皮膚病梅毒学講座を率いておりました土肥慶蔵（1866-1931）による「梅毒流行初期ノ径路」ですけれども、土肥は梅毒がアメリカ大陸からヨーロッパに持ち込まれ、その後世界に広まるさまを地図上に示しました。土肥の影響でしょうか、日本では、梅毒の起源について、諸説あることを断りながらも、コロンブス説を支持するような語り方が多く見られます。世界的に見ましても、梅毒の起源説は、

骨に残されている病変の痕跡の分析、また、DNA 解析がめざましい発展を遂げている現在も論争中です。DNA 解析による仮説には、例えば、2008 年のハーパー (K. N. Harper) らのアメリカ大陸説、2020 年のマジャンダー (K. Majander) らの「旧大陸」説などがあります。

一方、私が扱っております 19 世紀ロシアの文献史料からは、中央アジアやシベリアにおいて〈風土病〉的な〈梅毒〉が広く流行していたことが読みとれます。今日、通常、〈梅毒〉と称せられているのは〈性病性〉の梅毒ですが、その病原体と同じトレポネーマ属の細菌によるトレポネーマ症には〈風土性〉のものもあるといわれています。19 世紀中央アジアにおける〈風土病〉的な〈梅毒〉の像は、文字で記録されたその症状の分析に、さらに骨に残る病変の DNA 解析が加われば、より立体的になることでしょう。さらに、複数のトレポネーマ症の関係が DNA 解析等により明らかにされれば、梅毒の起源や伝播経路などの可能性を知る手がかりになるかもしれません。私自身は、そのような関心から、トレポネーマの DNA 解析についての論文を読むことに挑戦しようと思っており、本セミナーにおいては、水野先生、澤藤先生より、そのための基礎知識を学

びたいと思います。

先ほども申しましたが、研究分野ごとにそれぞれ手法や前提となるような考え方が異なりますので、独学で異分野の論文を読解することはなかなか難しいものです。本セミナーは、主に歴史学、考古学などの人文系の研究者や学生さんを対象としておりますが、皆様もそれぞれのご関心から、異分野の研究姿勢や成果を互いに理解し合うための初めの一歩として、本セミナーに接していただければ幸いです。

以上にて、趣旨説明を終えます。

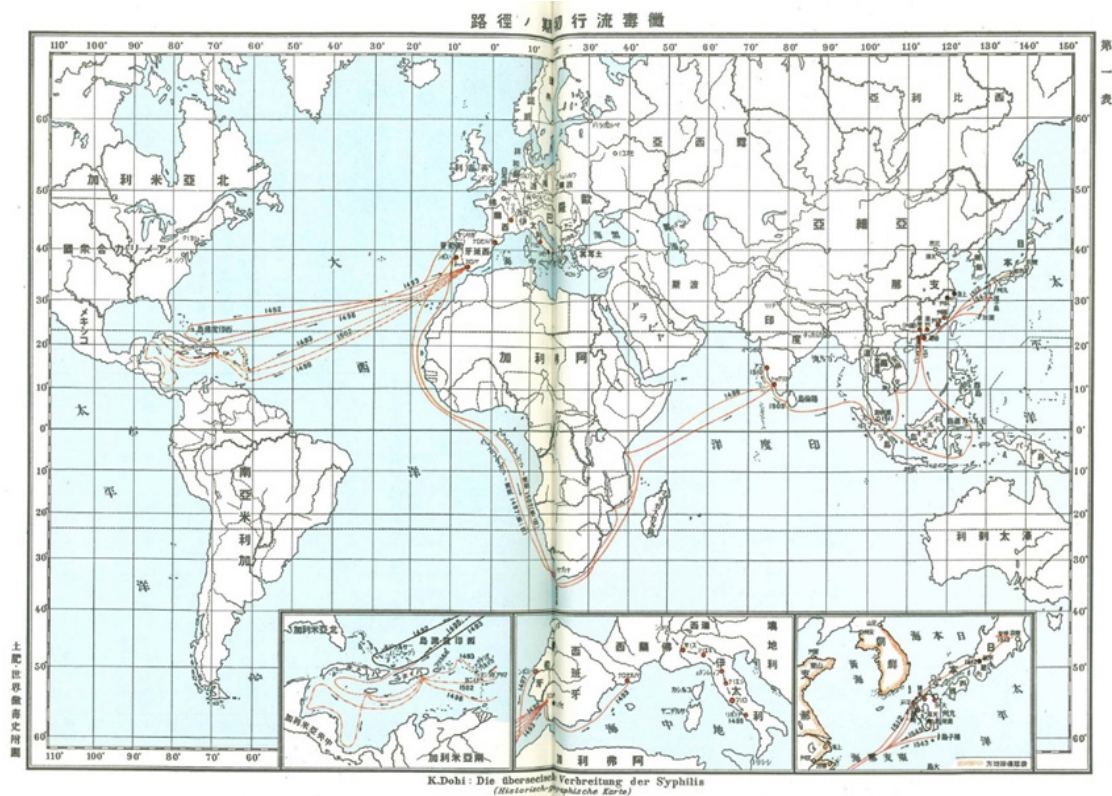


図1「梅毒流行初期ノ経路」(出典：土肥慶蔵『世界徴毒史』形成社、1973年、第一表)